

令和6年度(2024年度) 湖南省児童・生徒による人権作文集(第20集)

こころと心の つながりを求めて



みくもようこがっこう しょうがくぶ ねん くりす たいが
三雲養護学校 小学部 5年 栗栖 大河

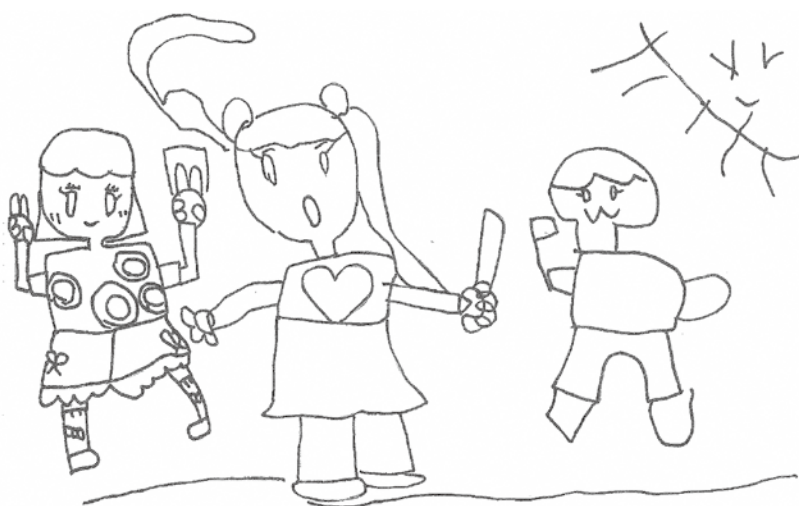
発行

湖南省・湖南省教育委員会・湖南省人権教育ネット推進協議会

事務局 人権擁護課 〒520-3288 湖南省中央1-1〔湖南省役所東庁舎1階〕
TEL 71-2322 FAX 72-3788 E-mail jinkyo@city.shiga-konan.lg.jp



「リレーたのしかったよ」



湖南市教育の根っこには、「いのち・人権」という揺るぎない土台があります。

この人権作文集には、湖南市の未来を担う子どもたちの気づきや決意が素直な表現で綴られています。その思いにふれると、思わず「私もそう思う。」とか「自分ならどうするだろう。」といったよに考えたくなってくることでしよう。それをきっかけにみなさんが「いのち・人権」について「自分事」として考えることができればうれしいです。どうか一つひとつのなかまの思いを大事に読んでみてくださいね。

湖南市教育委員会教育長

法山

由紀子

すてきなともだち

岩根小学校

一年

森

エレナ

わたしは、どうとくのじかんに、『二わのこごり』という学しゅうをしました。とりのやまがらがよるこんでくれて、ともだちのみそさざいは、うれしかったとおもいます。ともだちのところにいけてよかったです。

わたしもともだちがいてよかったことがあります。わたしは、うら山がはじめはにが手でした。でも、ともだちがささってくれたから、いけるようになりました。いまはいっしょにしゃべりながらのぼっているのと、とてもたのしいです。

わたしは、いつもかえりのかいで、ほめことばのシャワーをしています。ともだちのよいところをみんなではっぴょうします。わたしがほめてもらったことは、がんばってあるいて学校

にいつていることです。とてもうれしかったです。そんなにたくさんほめてもらえるとおもってなかったので、いっぱいしてくれて、びっくりしました。わたしもともだちのよいところをいいたくなりました。

これからわたしは、ともだちのよいところをもっと見つけたいです。そして、ともだちをたいせつにしていきたいです。



家ぞく

菩提寺北小学校

二年

恩谷

絢乃

わたしは、家ぞくについて学
しゅうしました。わたしは六人
家ぞくで、きょうだいはいは、わ
たしを合わせて四人で、妹と姉
と兄がいます。よくけんかをし
ておこられます。お母さんの
たん生日はすぎているけれど、
来年には、お姉ちゃんといっし
よに、たん生曰プレゼントでケ
ーキやお花を買ってあげようと
考えています。

「家ぞく」の学しゅうで、女
の人が二人で子どもを育てて
いる家ぞくがあることをはじめ
て知っておどろきました。なぜ
かという、わたしは男女で子
どものめんどろを見ることかぶ
つうだと思っていたからです。
男女じゃなくてもけっこんや子
どもの世話ができることを知っ
てすごいなと思いました。

男の人どうしの家ぞくでも子
そだてをすることがあることも
知りました。男女の家ぞくで
は、男の人は外でしごとをして、
女の人がせんたくやりよう理な
どの家の仕ごとをすることを思っ
いたので、男の人どうしのけっ
こんや子どもの世話はむずかし
いと思っていました。学しゅう
をしたあとは、外の仕ごとでも家
の仕ごと男の人でも女の人で
もきょう力すればできることだ
と分かって、ぜんぜんふしぎな
ことじゃないんだなと思いまし
た。



石部保育園

田中 想樹
5歳児

「ともだちといっしょにあそぶのたのしいな」

やさしいみんなわたしも同じ

菩提寺小学校 二年 橋口 心春

わたしたちの学校では、人けん月間中に、心がぽかぽかになる絵本の読み聞かせがあります。その読み聞かせを聞いて、わたしは心がぽかぽかになりました。その中でも、とくに『ええところ』という本が心にのこっています。『ええところ』を読んでもらって、考えたことや思ったことを書きたいと思います。

友だちができるようになってきたけれど、ちよつとまだふあんなところがあるわたしも二年生になりました。そして、人だすけができるようになりました。学校が休みの日、お出かけした公園でわたしとお兄ちゃん、小さな子とあそんでいました。そのときに、その子がこけてしまいました。わたしは、『なんとかしてあげたいな』と思ったので、もっていたティッシュをぬらしてふいてあげることにしました。お兄ちゃんは、その子のお母さんをベンチによびに行きました。その子のお母さんがばんそうこうをはってくれました。その子もお母さんも「ありがとう。」と言ってくれました。そのあと、休けいしてから

またあそぶことにしました。その子は帰るときにもまた、わたしたちに「ありがとう。」と声をかけてくれて、とてもうれしかったです。

やさしいみんなとわたしも同じで、こまっている人や、かなしんでいる人を見かけたらやさしくしたいです。



「えんていでともだちとあそんだよ」

ほっぺのこどもえん
HOPPA石部
中田 紗月
5歳児

私にできること

下田小学校 六年 喜多 咲月

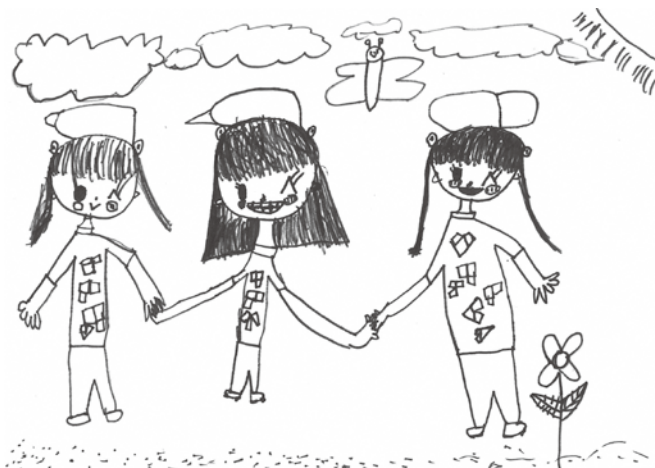
夏休み、私は一冊の本を手にとった。この本は、小学五年生の主人公が、自分の住むヒロシマの街を歩きながら、今も消えない原爆の傷と人々の思いについてふれていく物語だ。戦争とは、武力を用いた国同士のけんかだと知っている。でも、なぜ戦争になったのか、戦争で何が起きたのか、実のところあまり分かっていない。そこで、滋賀県平和祈念館に連れて行ってもらった。

何か熱いものが、私の胸に残っていた。そんな中、祖母に話を聞くことができた。私の曾祖母は、戦闘機から狙われて亡くなりかけたことがあったらしい。その瞬間、すごくゾッとした。考えたくはないが、そこで曾祖母が亡くなっていたら私はこの世には、いなかった。曾祖母が生き延びてくれたことに、感謝してもしきれない。戦争は、教科書や本の中だけの話ではなかった。私の命とこんなにも直接的に関わっているのだと、気付いた。だから、先祖が繋いできてくれたこの命を大切に、今を全力で生きなければならぬ。

私の学校には人権月間がある。自分の命も友達の命も大切にするために、児童みんなで考える期間だ。私は児童委員会に所属している。この人権月間で、自分や友達をより大切にする取組が何かできないだろうか。例えば、クラスの友達にほかほかレターを書く取組。日頃の感謝の気持ちを、言葉で伝えてみるのはどうだろうか。他には、友達の「いいところみつけ」をたくさんして、ハートの紙に貯めていく取組。クラスだけでなく、昇降口や廊下にポストを設置して、ハートメッセージを入れてもらうのもいいだろう。この人権月間を通して、『命を大切に、相手を尊重し合える学校づくりを目指していきたい』と強く思った。

私は、この本と出会ったことで、命について深く考える機会が得られた。そして、私の力は小さいかもしれないけれど、相手を知り、尊重し合える関係を築くことで、お互いが命を大切にして、争いのない平和な社会をつくっていかないと信じていた。

今年の八月十五日は、私にとって今までとは全く違う日だった。正午、黙祷をし、戦争で亡くなった人たちに祈りを捧げた。



三雲くしら
保育園
ゲンニャットヌー
5歳児

「友達の手、あったかいな」

自分の意見を話すこと

水戸小学校 六年 平田 梨乃

私は、社会科の学習を通して、百姓や武士が、川の近くに住んでいるというだけで、その人たちを差別していたということを知り、よくないなと感じました。同じ人間なのに、少しの違いでどうして差別をしてしまうのだろうと思いました。歴史学習をしていく中で、これまでの私自身の経験を振り返りました。

四年生のころに、友達に合わせて、話したこともなかったAさんの悪口を言ってしまったことがあります。

ある時、Aさんと話す機会があったので話してみたら、すごく優しい子だと感じました。それと同時に、どうしてあんなひどいことを言われていたのかなと思い、悪口を言っていた子に、

「どうしてそんなにAさんのことを悪く言ったの？」

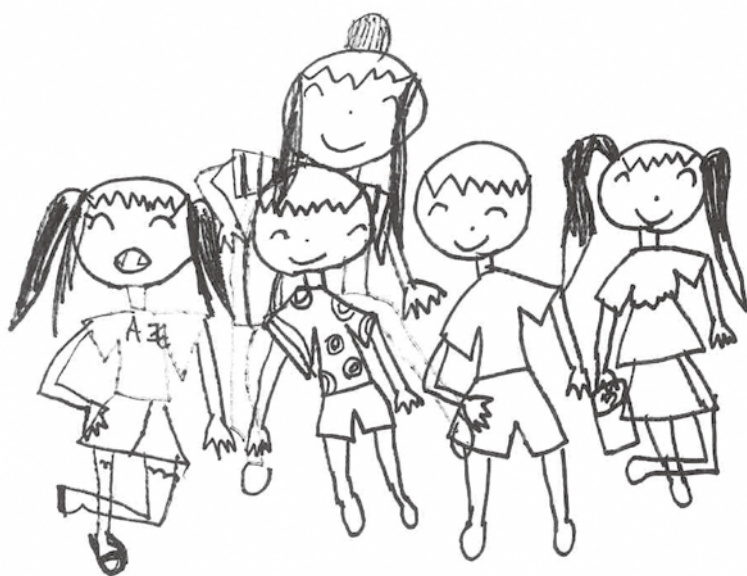
と、聞きました。すると、

「だって話したことないけど、イメージが……。でも、あなたが『確かに』と言ってくれて安心してん。」

と、笑いながら話していました。私があのとき合わせてしまったせいで、悪口を言っていた子にも、言われていたAさんにも、悪いことをしてしまったと、その時に気づきました。あのとき合わせなければ、もしかしたら二人とも仲良く遊べたかもしれないのに、なぜ合わせてしまったのだろうとたくさん後悔が残りました。しかし、適当に話を合わせていただけだと今更言う勇氣もなく、ずっとなやんでいます。

この経験から私は、知らないものは知らない、思っていないことは思っていないと言ったことが大切で、正しいことだと思いうようになりました。例えば、この出来事もそうですが、何か質問されたときに、分からないことをかくすために、「知っていない。〇〇だよ。」などと言ってしまうと、トラブルをまねく

きっかけや、かんちがいを生むことにもつながります。私は、これからの生活では、人の意見に共感することも大事だけど、「ダメなことはダメ」、「分からないことは分からない」と、はっきり言おうと決めました。そして、自分の意見をしっかりと話すことを大切にしていきます。

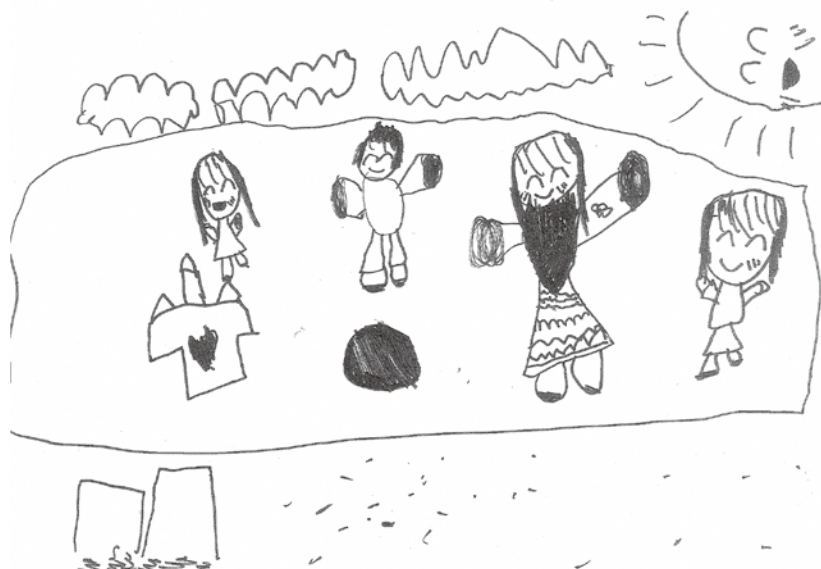
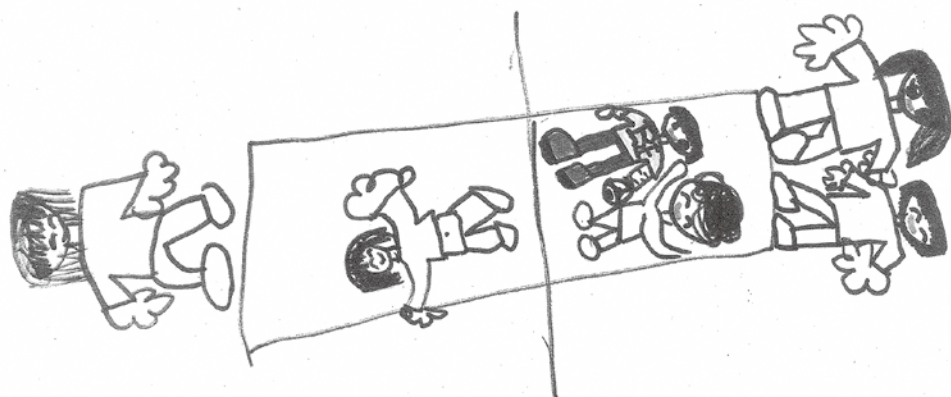


(びわこ合宿のたんけんの時)
「ばりひからおてがみきた」

甲西あかつき保育園
松井 玖仁佳
5歳児

岩根こども園
奈良崎 彩瑚
5歳児

「ドッチボールであそんだよ」



平松こども園
若本 咲希
5歳児

「みんなでおしろをつくったよ」



光星学園
三雲幼稚園
垂井 咲奈
5歳児

「みんなでかくれんぼたのしかったよ」

人権学習を通して

石部中学校 二年 青木 凛桜

中学校で部落差別問題学習をして改めて差別はいけないことだと感じました。なぜ差別をしてはいけないと思ったのかというと、差別によって傷ついてしまったたり、嫌な思いをしてしまったりする人が多く、日本の中で平等に暮らせていない人がいると思ったからです。

日本では幕府によって仕事や着るもの、住む場所が制限されるという差別があり、今でも就職や結婚という人生の転機に差別する人、差別される人がいるということを知りました。私は初めて部落差別について学んだとき、部落差別について教えるから差別が無くならないのではないかと思っていました。しかし、差別の現状を知ったとき、今でもこんなにひど

い差別が続いているのはなぜなのか、差別について学び、正しい知識を身につけていなければいけないと感じました。私たちの身の回りには区別に終わらず、差別につながるがあり、日本国内にはたくさん差別があります。差別のはじまりは一人ひとりの心の中にある小さな偏見です。自分やまわりの人の中にある偏見が差別につながっていることを一人ひとりが知り、指摘していく必要があります。例えば「男の子だから」「女の子だから」そんなことを言ってしまったとき、まづは自分の中にある無意識の偏見や、差別的なものの見方、考え方などを改めようとする力をつけることが必要だと私は思います。知らず知らずのうちに人を

傷つけてしまうことはとても悲しいことだからです。私は一人ひとりが思いやりを持ち、自分の思い込みや偏見に気付く、無関心にならず差別に気付いて指摘し、なくしていけるような社会にしていける人でありたいです。

この先、身近にある差別を少しでもなくし、傷ついたり嫌な思いをしてしまったりする人を減らしていくために私は関わる人一人ひとりに思いやりをもつて接することを心がけたいです。



あしほ乳児
保育園
ルー ゴック リン
2歳児

「みんなであかちゃんをみているよ」

差別の怖さ

甲西中学校 二年 大久保 香子

私はこれまでの人権学習で、差別された人の気持ちや差別につながる発言をしている人への注意の仕方などを学びました。最初、自分は絶対差別をしていないと思っていましたが、それは違うかもしれないと感じました。『ある高校での会話』という資料で学習した時は、そのつもりがなくても知らない間に差別をしている可能性に気づき、根拠のない情報を信じて人を傷つけるのは最低だと思いました。無意識の思い込みが全て悪いわけではないけれど、自分の発言で相手が傷つくこともあります。私は差別につながる言動を見たり聞いたりしたとき、どうすればいいかわからず、注意できる自信がありませんでした。でもみんなの意見を聞いて、

て、どう注意すればよいのか分かりました。実際、身近な人が差別につながる発言をしたとき、良くないことだと気付いて、「それはだめやろ。」と注意ができました。分かってもらえないかと思いましたが、関係が壊れてしまいそうでした。ただで良かったです。また同じことがあれば怖がらずしっかりと注意し、差別を減らしたいです。また、講師Aさん、一緒に活動されている大学生Bさんの話を聞き、いろんな人と関わって人の気持ちを知らたり、人権に関するイベントに参加したりすることは、自分のためになると思いました。大学生Bさんは不登校だったとき、地域のコミュニティセンターでさまざまな

活動をされていました。そこでいろんな立場の子たちと出会ったけれど、それまでの関係を変えることなく仲良くしていることを聞き、私も誰かを差別したり特別視したりせず、交流したいと思いました。私は、差別を減らすためにどうすればよいか、最初は分かりませんでした。講師Aさんは「自分のそばにあるおかしさに気付くこと」、大学生Bさんは、「良い意味で『何もしないこと』と話されました。これは本当に『何もしない』ということではなく、どんな立場の人であろうとそれを理由に差別するのではなく、お互いを尊重しながらこれまで通り自然に付き合うという意味です。自分のそばにあるおかしさに気付くというのは、差別に気付く自ら差別をなくすための行動ができるということです。」

ていきたいです。まずは悪い影響をもたらし無意識の思い込みや偏見をなくしたいです。発言に責任をもち、そばにいる人を大切にしていきたいです。



「えんていであそんでいるところ」

京進のほいくえん
HOPPA菩提寺西
谷 あいり
5歳児

演劇『ある晴れた夏の朝』を鑑賞して

甲西高等学校 二年 齋藤 光音

私は今回、演劇を鑑賞してとても感動をしました。最初のあたりは、『原爆投下は是か非かなんて考えるものではない』と
思っていたので、肯定派の意見を聞いていても何も心が動かされることはありませんでした。
どんな話を聞いても『原爆は当然、悪ではない』と
思っていたので、肯定派の意見を聞こうとしていなかったところもあったのかもしれない。
しかし、劇も中盤に入ってくると、自分の考えが何かよく分からなくなりました。元々の自分
は『原爆は悪で、何の罪もなく暮らしていた広島・長崎の人
たちが突然に命を奪われてしま
ったから、アメリカを許しては
いけない』と
思っていたはずなのに、肯定派の意見を聞いてい

るうちに、『私たちは、学校などでそう教わったから悪だと思
っていたのかもしれない』と
気が付きました。自分でしっかりと調べて知って、本当は肯定派なのか、否定派なのか、周り
とあ
わせずに理解していくべき内容だと強く思いました。
劇も終わりが近づいてくると、迷いながらも『やはり私は否定派なのだ』と感じました。肯定派が言っていることは、とても考えさせられるもの
でしたが、原爆を落とされた国の者として、これから生きていく者として、原爆を悪として捉え、悪だったのだと広めていき、根本にある人種差別を否定
していきたいと思いました。
今回の演劇はとても難しく、でも見て見ぬふりはできない

お話でした。登場人物の成長や日本のこと、アメリカのことにナチスのこと、そして、自分の意見をしっかりと他の人と共有し、考えていくこと、これからの人生でもとても大事にしていかな
いといけないことをたくさん学びました。最終的に、私は否定派になりましたが、一緒に

演劇を見ていた人の中にも「初めから肯定派の人」、「最終的に肯定派になった人」もいると思うので、一人ひとりが気付いた気持ち大切に、どんどん伝えて話し合っ
てほしいなと思います。私も人種差別のことをもっとしっかりと調べて知
りたいです。

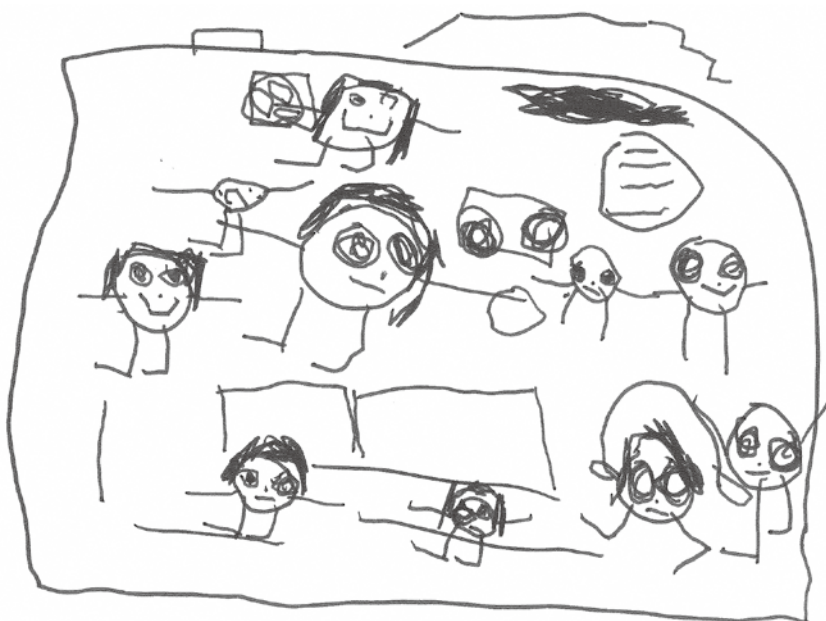


「ともだちとおそとであそんでいるよ」

菩提寺優愛
保育園 モンチ
中島 要
5歳児

菩提寺
くじらこども園
濱田 蓮翔
4歳児

「たのしかった うんどうかい」



光星学園
認定こども園 ひかり幼稚園
浦谷 梨愛
5歳児

「がんばった運動会」

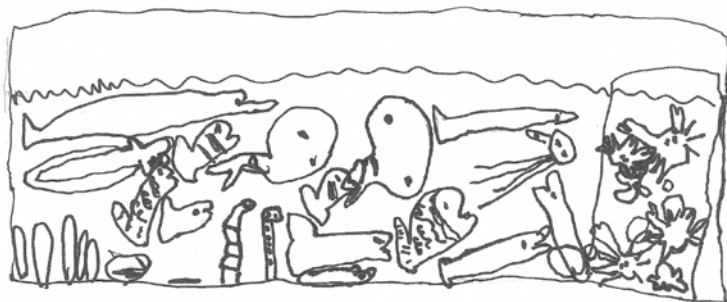
下田こども園
山本 愛大
5歳児

「ともだち だいすき」





「えんていでおともだちと
あそんでいるところ」



「えんそくですいそくかんにいったよ」



「そとあそびだいすき！
ともだちいっぱいなのしいな！」

